

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 杉本 英晴

論 文 題 目

大学生の進路意思決定遅延メカニズムの解明  
— 就職イメージを中心概念としたモデルの構築 —

論文審査担当者

主 査	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷 素之
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	金井 篤子
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石 賢二

## 論文審査の結果の要旨

## 別紙 1 - 2

近年、大学から職業社会への移行の困難さが社会的関心を集めており、就職活動を開始せず、進路未決定を常態化する大学生の存在が指摘されている。これまでの大学生における進路意思決定研究では、進路として就職を考えているが進路意思決定が困難な学生にばかり焦点があてられ、就職することに無関心な学生や忌避的な学生といった就職志向でない学生には焦点があてられてこなかった。そこで本論文では、就職志向でない大学生の進路意思決定遅延メカニズムを解明することを目的とした。

第1章では、大学から職業社会への移行が困難な現状をふまえつつ、進路選択行動研究、「働くこと」に対する認知表象研究、進路意思決定に影響を及ぼす社会的環境研究を概観した。その上で、準備段階の進路探索行動や個人差要因、社会的環境を規定要因とし、就職イメージを媒介して、大学生の進路意思決定の遅延を予測する仮説モデルを構成した。

第2章「就職イメージ尺度の作成」では、進路意思決定遅延モデルの中心概念である就職イメージの構造を大学生の視点から明らかにし、就職イメージ尺度を作成することが目的であった。そこで社会人との比較調査から大学生の就職イメージを明らかにした上で（研究1）、就職イメージ尺度（5件法版）を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った（研究2）。次に就職イメージ尺度（5件法版）を7件法版に拡張し、信頼性の検討を行うとともに（研究3・4）、「就職しないこと」イメージや進路未決定との関連から構成概念妥当性（研究3）および、因子的妥当性と就業動機との関連性から収束的妥当性を確認した（研究4）。

第3章「就職イメージが進路意思決定の遅延に及ぼす影響」では、就職イメージが大学生の進路意思決定の遅延に及ぼす影響を検討することが目的であった。その際、進路意思決定に関わる適応指標と行動指標を取り上げた。まず、適応指標としては進路未決定と充実感を取り上げ（研究5）、行動指標としては、就職活動プロセスのエントリー活動、および初期活動に注目し（研究6・7）、それぞれ就職イメージとの関連性を検討した。また、進路選択の準備段階であるキャリア探索が、就職イメージを媒介してネガティブなキャリアセンターイメージに及ぼす影響を明らかにした（研究8）。その結果、就職イメージの制度的・希望的・自立的イメージは進路意思決定を促し、拘束的イメージは進路意思決定を遅延に導くことが示された。

第4章「社会階層・家族関係が就職イメージ形成に及ぼす影響」では、就職イメージの形成要因である社会的環境の中でも社会階層と家族関係を取り上げ、就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した。社会階層についてはキャリアモデル・ネットワークと就職イメージとの関連性（研究9）、および、文化階層が家族システムの機能状態を

## 論文審査の結果の要旨

## 別紙 1 - 2

媒介して就職イメージに及ぼす影響を検討した（研究 10）。さらに家族関係については親子関係に注目し、親への愛着が就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した（研究 11）。その結果、社会階層は就職イメージに直接的な影響を及ぼさず、機能不全の家族システムや親への不安定な愛着が、進路意思決定を遅延に導く就職イメージの形成に寄与することが示された。

第 5 章「友人ネットワークが就職イメージ形成に及ぼす影響」では、就職イメージの形成要因である社会的環境の中でも友人ネットワークを取り上げ、就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した。そこで、家族関係と親しい友人グループとの関係、および、大学生が所属する社会的ネットワークの構造（研究 12）と、友人ネットワーク構造（研究 13）を取り上げ、就職イメージとの関連性を検討した。その結果、良好な家族関係にあっても、道具的でない限定型の友人ネットワークが進路意思決定を遅延に導く就職イメージの形成に寄与することが示された。

第 6 章「就職イメージを規定する個人差要因」では、限定的な友人ネットワークを築き、進路意思決定を遅延させる就職イメージを形成する個人差要因を明らかにすることを目的とした。まず、限定的な友人ネットワークを築く者の特徴である仮想的有能感に焦点をあて発達の観点から時間的展望を検討し（研究 14）、さらに小集団閉鎖性に焦点をあて不快情動回避心性が小集団閉鎖性を媒介してネガティブな就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した（研究 15）。その結果、進路意思決定を遅延に導く就職イメージを形成する者は、肯定的な時間的展望を抱くことが困難であり、不快情動回避心性が高いため、低い自己評価を最低限維持するために、他者を軽視し限定的な友人ネットワークを築くことが示された。

第 7 章では、本論文で得られた研究知見をもとに、第 1 章で構成された大学生の進路意思決定遅延モデルを再構成した。その上で、本論文の意義を述べ、今後のキャリア教育・支援の提言を行った。大学生の進路意思決定遅延モデルは、本論文で検証された研究知見により概ね支持され、これまで検討が不十分であった就職志向でない学生において、彼らの社会的環境をふまえつつ、進路意思決定を遅延し進路未決定を常態化するメカニズムを明らかにできたことは本研究の意義といえる。その上で、就職志向の学生に有効とされる現行のキャリア教育・支援が、就職志向でない学生に対して十分な効果を発揮していないことを指摘し、本モデルに合わせたキャリア教育・支援の提言を行った。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の特色および意義として、主に以下の点があげられる。

- (1) これまで大学生のキャリア教育研究でほとんど扱われてこなかった、“就職イメージ”という認知的表象に注目し、それが制度的イメージや自立的イメージ、そして拘束的イメージといった多層的な構造からなることを明らかにした。
- (2) 就職イメージが、進路未決定や時間的展望などの変数、また実際のエントリーなど初期の就職活動、そして社会階層、家族関係、友人ネットワークなど包括的な社会的環境と意味ある関連をもつことを実証的に示した。
- (3) 『進路意思決定の遅延メカニズム』という研究および教育実践上の重要な問題に注目し、その心理学的プロセスを、仮説に沿って質的量的データから労力をかけて丁寧に検討し、独自の視点を提示した。

本論文に対して、審査委員からは以下のような疑問点、問題点が指摘された。

- (1) 導入部にあたる記述で、専門用語やキーワードの説明が十分になされていない部分があり、そのため本論文全体における問題の位置づけがわかりづらい。
- (2) 進路未決定の大学生にも、さまざまなタイプが想定され、本論文が問題としているのはどのような学生なのかがイメージしにくい。本論文の主たるターゲットに関してより適切な説明が必要ではないか。
- (3) 本研究の対象者は、ほとんどが文系大学生であるが、理系の場合、あるいは文系でも公務員や教員志望、あるいは進学希望の学生もおり、結果の一般化には慎重であるべきだろう。
- (4) 調査対象者の属性、学年や性別などの情報に関して、記述が不十分、不整合な部分がある。結果の解釈のためにもこれらの情報は適切に表記するべきである。
- (5) 就職イメージのなかの“拘束的イメージ”は、環境移行期にある大学生には当然のイメージであり、それをポジティブに転換させるような支援の方策を考えるべきではないか。

以上のような審査委員からの指摘に対して、学位申請者は問題を十分に認識しており、本論文の課題を踏まえるとともに、今後の研究に向けた適切かつ建設的な応答がなされた。

このような結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。